

地域活動組織 紙ふうせん

南さつま市加世田内山田 3512-2

発表者：坂 口 トミ子

地域活動組織紙ふうせん会長の坂口トミ子です。

私たちは、大人の大きな手で、紙ふうせんにそつと優しい息を吹き込んで、大空に飛ばすような心で子どもの養育に取り組み、子どもたちを健全に育成することを喜びとして活動しています。

平成9年4月1日発足して、今年で15年目になりました。



活動の目的は、①児童健全育成、②日本文化の伝承、③三世代交流、④児童の交通安全（安心パトロール）です。

会員は70名で、二つのグループに分かれて活動しています。

今後の活動は、自分をはじめ、周りの人々との交流を深め、健康で普通の暮らしができるように互いに過ごしたいと思います。

そのためには、①自助努力をしよう、②共助し合おう、③公的機関に相談しよう、ということに努めることにしています。

活動の一例として、本日は朗読劇「かさこ地蔵」を発表させていただきます。

唄・坊やよい子だネンネしな

昔々あるところに爺さまと婆さまがおりました。大層貧乏で、その日その日をやっと暮らしておりました。ある年の大晦日、爺さまはため息をついて言いました。

爺さま「あーあー、その辺までお正月さんがござらっしゃるとゆうに、餅っこの用意も
できんの一」

婆さま「ほんにの一、何ぞ売るもんでもあればええが一」

爺さまは、座敷を見回したけど何にもありません。

爺さま「ほんに何にもありやせんの一」

婆さまは、土間の方を見ました。すると、夏の間に刈り取っておいた菅すげが積んでありました。

婆さま「爺さま、笠っこさえて町さ売りに行ったら餅っこ買えんかの一」

爺さま「おうおう、それがええ一、そうしょう」

そこで、爺さまと婆さまは土間に降り、菅すげを揃えました。

（ざんざら一、ざんざら。ざんざら一、ざんざら。ざんざら一、ざんざら）

そして、せっせと菅すげを編みました。

笠が五つできると爺さまはそれをしょって、「帰りには餅っこ買ってくるでな一。ニンジン、ゴンボもしょってくるでの一」と言うて出かけました。

街は大年の市が立っていて、正月買いもんの人で大賑わいでした。

「え一松はいらんか一。お飾りの松はいらんか一」

「ゴンボにニンジン、ゴンボにニンジン、ダイコンはいらんか一」

「臼はどうじゃ、杵はいらんか一」

「正月のべべはどうじゃ一、きれいなべべはどうじゃ一」

「魚、さかな、鯛の魚はどうじゃ一」

「さ一安いぞ、安いぞ、買ってけ、買ってけ」

年越しの日に市は大賑わいでした。爺さまも声を張り上げました。

爺さま「え一笠屋一、笠屋。笠っこはいらんか一」

けれども、誰も振り向いてくれません。

爺さま「え一笠屋一、笠屋。笠っこはいらんか一。え一笠屋一、笠屋。

年越しの日に笠っこなんか買う者はおらんのじやろう。あ一あ一、餅っこも



持たんで帰れば婆さまがっかりするだろうのー」

いつの間にか日も暮れました。爺さまはとんぼりとんぼり町を出て、村のはずれの野っ原まで来ました。

風が出てきてひどい吹雪になりました。ふと顔を上げると地蔵様が六人立っていました。お堂はなし、木の陰もなし。なもんで、地蔵様は片側だけ雪に埋もれているのです。



爺さま「おーおー、お気の毒になー。さぞ

冷たかったらうのー」

爺さまは、地蔵様のおつむの雪を掻き落としました。「こっらの地蔵様はほったにシミをこさえて、それからこの地蔵様はどうじゃ、鼻からつららを下げてござらっしゃるー」

爺さまは、濡れて冷たい地蔵様の肩から背中やらをなでました。

爺さま「そうじゃ、この笠っこ被ってください」

爺さまは、売り物の笠を地蔵様に被せると、風で飛ばぬようしっかり顎のところで結んであげました。

ところが、地蔵様の数は六人、笠は五つ。どうしても一つ足りません。

爺さまは、自分のつぎはぎだらけの手ぬぐいを取ると、「おらーので悪いがこらえてくださいー」と一番終いの地蔵様に被せました。

爺さま「これでえー、これでえー」

爺さまは、やっと安心して家に帰りました。

爺さま「婆さま、婆さま、今帰った」

婆さま「おーおー、爺さまかい。さぞ冷た

かったらうのー」



婆さまは、爺さまの手に笠が一つもないのに気がつきました。

婆さま「爺さま、笠っこは売れたのかね」

爺さま「それがさっぱり売れんでのー」

爺さまは、途中まで来ると地蔵様が雪に埋もれていた話をして、「それでおらー、笠っこを被せてきた」と言いました。すると婆さまは、嫌な顔を一つしないで、「それはえーことをしなすった。地蔵様もこの雪じゃさぞ冷たかったろうのおー。さあ、さあ、爺さま、囲炉裏に来て当たってください」

爺さまは、囲炉裏の上にかぶさるようにして、冷えた体を温めました。



爺さま「やーれやれ、とうとう餅っこなしの年越した。そならひとつ、餅つきのまねごとでしようかのー」

婆さま「それはいいー」

爺さま 唄…米の餅っこ、ひとうすばったら
婆さまも「ほほっ」と笑って相取りのまねをしました。

婆さま 唄…粟の餅っこ、ひとうすばったら

二人 唄…はい、ばったら、ばったら、ばったら、ばったら

それから二人は漬け菜かみかみ、お湯を飲んでやすみました。

すると、真夜中頃の雪の中を

唄…「じょいやった、じょいやった、じょいやった、じょいやった、じょいやった、じょいやった」

と櫓そりを引く掛け声がしてきました。

唄…「じょいやった、じょいやった、じょいやった、じょいやった」

爺さま「婆さま、今頃誰じゃろか。長者ど

んの若い衆が正月の買い物をし

残して今頃引いてきたんじゃろか」

ところが、櫓そりを引く掛け声は、長者どんの屋敷の方には行かずこっちに近づいてきました。

二人がじっと耳を澄まして聞いてみると、



唄・・「六人の地蔵さ と〜んとん、笠っことって被せた と〜んとん、爺さまの家はどこだ、婆さまの家はどこだ。じょいやった、じょいやった、じょいやった、じょいやった」

と唄っているのです。そして、爺さまの家の前で止るとなにやら重い物を「ずっさん、ずっさん、ずっさん」と降ろしていきました。

爺さまと婆さまが起きて行って雨戸を繰ると、笠っこを被った地蔵様と手ぬぐいを被った地蔵様が「じょいやった、じょいやった」と空櫓^{からぞり}を引いて帰って行くところでした。

婆さま「爺さまー」

爺さま「おっおっ、これは」

軒下には米の餅、栗の餅の俵が置いてありました。そのほかにも味噌樽、ニンジン、ゴンボやダイコンのかます、お飾りの松などがありました。爺さまと婆さまは、おかげで良い正月を迎えることができました と。

唄・・「六人の地蔵さ と〜んとん、笠っことって被せた と〜んとん、爺さまの家はどこだ、婆さまの家はどーこーだ。」

お 終 い

